死

「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。」（ヨブ記19:25-26）

信仰者であってもなくても、人間はだれでも死を免れない。けれども聖書の中の「死」ということばにはいくつかの意味がある。そこで神との関係を持つ人にとってそれぞれの意味がどのようにかかわるかを理解することが大切である。

罪の結果としての死

創世記２－３章は罪（人間が神に逆らい自分勝手な道を行くこと）によって死がこの世界に入ってきたと教えている。人間の先祖であるアダムとエバは永遠に生きるものとして創造された。けれども神の指示を拒んだとき、神が願っておられたいのちの祝福を失ってしまった。神の直接の命令に逆らうことによって、罪の刑罰とのろい、つまり死を受けることになったのである。

（1）アダムとエバは肉体的に死ぬものになった。初めに神はエデンの園の中にいのちの木を植えて（⇒創2:9注）、人間が絶えずそれを食べることによって死なないようにされた。けれども神は初めから人間に神の教えを受入れて従うかどうかを決める能力と機会を備えておられた。アダムとエバはその選ぶ能力を用いて神に背いて（反対の態度をとる）しまった。ふたりが善悪を知る木の実を食べたあと、神は「あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない」（創3:19）と宣告された。ふたりは食べたその日に肉体的には死ななかったけれども、神ののろいの結果として死の法則に支配されるようになった。

（2）アダムとエバは道徳的死を体験した。神はアダムに対して禁断の実を食べるなら必ず死ぬと警告された（創2:17）。これは重大な警告だった。アダムと妻は罪を犯したその瞬間に肉体的には死ななかったけれども、道徳的死が瞬間的に始まって人間性は腐敗し罪深いものになり、神に逆らうものになった。アダムとエバが神に逆らってその本性が変えられたときから、人間はみなその罪の性質を持って生れて来る（ロマ8:5-8）。つまり、神やほかの人々のことについては関心を持たないで、自分自身の勝手な道を進もうとする生来（持って生れた、継承した）の欲望を持って生れている（→創3:6注，ロマ3:10-18注，エペ2:3，コロ2:13）。

（3）アダムとエバは神に逆らったとき、霊的死も体験した。つまり神との親密な関係が破壊されてしまった（創3:6注）。ふたりはエデンの園の中を神と一緒に歩いたり話し合ったりすることを楽しもうとしなくなり、神の臨在から身を隠してしまった（創3:8）。キリストから離れた人はみな神と神が与えてくださる究極のいのちから遠く離れていると聖書は教えている（エペ4:17-18）。それが霊的に死んでいるという意味である。

（4）罪の結果としての死には永遠の死がある。アダムとエバが神の警告（⇒創3:22）を受入れていたらその結果は永遠のいのちだった。ところがその代りに永遠の死の原理が働くようになった。永遠の死は霊的に罪の宣告を受けて永遠に神から離されることである。この死は神を拒み、その教えに背いた結果である（→創3:4注）。このことを聖書は「そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです」と言っている（Ⅱテサ1:9，→ロマ6:16注）。

（5）死のあらゆる面に勝利する方法はただ一つ、イエス・キリストを信じることである。この方は「死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました」（Ⅱテモ1:10）。主イエスはその死によって罪の罰を完全に支払って、人々を神と和解（神との個人的関係を持つ機会を回復すること）させてくださった。そして罪の結果である、霊的に分離されたのろいを逆転させてくださったのである（→創3:24注，Ⅱコ

リ5:18注)。キリストは超自然的に復活して、サタンの力と罪の力、肉体の死の力と支配権を打破り克服された(→創3:15注, ロマ6:10注, ⇒ロマ5:18-19, Ⅰコリ15:12-28, Ⅰヨハ3:8)。神に従う人々は永遠の死の苦しみを受けることはなく主イエスとともによみがえるという信仰は、既に旧約聖書の神の民の信仰になっていた(→ヨブ19:25-26, 詩16:9-11, →「**肉体の復活**」の項 p.2151)。

信仰者にとっての肉体の死の意味

キリストを信じる人々は復活のいのちの確信を持っていても(ヨハ11:25-26)、肉体の死を通らなければならない。けれどもキリストにいのちをゆだねた人々はキリストを受入れていない人とは違った意味で死に近付く。神を知り従う人々の死について聖書は次のような真理を啓示している。

(1) キリスト者にとって死はいのちの終りではなく、新しい始まりである。死は恐ろしい何か(Ⅰコリ15:55-57)ではなく、より充実した完全ないのちへの移行点である。死はキリスト者をこの世界のわずらわしさ(Ⅱコリ4:17)と地上の肉体から解放して、天のいのちと栄光を身に着けさせてくれる(Ⅱコリ5:1-5)。パウロは肉体の死を眠りと呼んで(Ⅰコリ15:6, 18, 20, Ⅰテサ4:13-15)、死は地上の労働と苦痛からの休息であると説明した(⇒黙14:13)。それは信仰を持って先に世を去った人々と一緒になることである(→創25:8注)。また、肉体の死は生きた神の臨在の中に入る入口である(ピリ1:23)。

(2) 聖書は信仰者の死を慰めに満ちたことばで説明している。神を敬う人の死は「主の目に尊い」(詩116:15)。死は「平安」(イザ57:1-2)への入口、「栄光」(詩73:24)への入口であり、「パラダイス」(ルカ23:43)に入ること、「住まいがたくさんあ」る(ヨハ14:2)私たちの父の家に行くこと、「キリストとともにいる」(ピリ1:23)祝福された門出、「主のみもとにいる」(Ⅱコリ5:8)こと、「キリストにあって眠」る(Ⅰコリ15:18, ⇒ヨハ11:11, Ⅰテサ4:13)こと、「はるかにまさってい」る(ピリ1:21, 23)ことであり、「義の栄冠」(→Ⅱテモ4:8注)を受けるときである。

(3) キリスト者の死と肉体の復活の間の期間について聖書は次のように教えている。

(a) 死の瞬間にキリストに従う人はすぐに主のみもとに入れられる(Ⅱコリ5:8, ピリ1:23)。

(b) 信仰者は完全な意識を持って存在し(ルカ16:19-31)、神の愛と慈しみによる喜びを体験する(⇒エペ2:7)。

(c) 天国は家庭のように休息と安全の場所であり(黙6:11)、ほかの信仰者とともにいて交わる場所(ヨハ14:2注)である。

(d) 天国には礼拝と祝典と賛美(詩87:, 黙14:2-3, 15:3)、定められた務め(ルカ19:17)、飲食(ルカ14:15, 22:14-18, 黙22:2)などの活動がある。

(e) 肉体の復活を待つ間の信仰者は肉体を持たない目に見えない霊ではなく、天のからだを身に着けている(ルカ9:30-32, Ⅱコリ5:1-4)。

(f) 天国で信仰者は個性を持ち続けている(マタ8:11, ルカ9:30-32)。

(g) 地上の生活から移った信仰者は、地上での神の目的が完成するのを待続け期待し続けている(黙6:9-11)。

(4) 神を信じる人々は大きな希望と喜びをもって死とその向こう側を見ることができるけれども、人々、特に愛する人々が死ぬときには悲しむものである。たとえばヤコブが死んだときヨセフは父のために深く嘆いた。ヨセフが父親に対して示した愛と尊敬の姿は愛する人々の死を体験する信仰者へのよい模範を示している(→創50:1注)。